



特集 [文・写真] 中村達雄
text & photo : Nakamura Tatsuo

穏やかな島嶼世界

シコクノシマツラシ
九份、金瓜石の集落は、基隆郊外にある瑞芳の山の斜面に羊が群れるように寄り添っている。斜面は急峻で、高度差数百メートルの裾野には深澳や南雅などのひなびた漁村が広がり、そこに東シナ海の荒波が打ちよせてくる。南雅漁港から数キロほど東進すると鼻頭角とよばれる半島があり、紺碧の東シナ海はそれを境に太平洋へと名前を変え、南国の太陽が海面を温め、気化した海水が霧となって山の斜面をはい登ってくるので、ほんの15分か20分の間、この小鎮はときとしてモノクロームの世界に一変してしまふのだ。

鼻頭角からさらに数キロ南に下った海岸線には、明治期、台湾統治の第一陣としてやってきた大日本帝国の軍艦が投锚した三貂角(半島)が突き出ている。その東南方200キロの沖合いは、もう、与那国、西表、石垣といった日本の海域になる。

台湾の津々浦々を訪ねると、そこで生活する庶民や自然にある種の心地よい湿度のよつなものを感ずることがある。それは緯度こそ違つが、同じ島国といえる日本の国土や人にも共通しているようだ。その心地よさを醸し出しているの

九份 金瓜石

霧に煙る「悲情城市」の街

は、いったいなんだろう。媽祖廟の美しい屋根に見とれながら、脈絡もなくそんなことを考えてしまう。

中国大陸の人々にこのことを話すと、それはかつて台湾が日本の植民地だったからでしょう、などと揶揄されそう。しかし心地よさの原因は、決してそんな理由からだけではないだろう。あえてこじつけるならば、農耕地帯と遊牧地帯の中間に苛酷で広大な超乾燥エリアをかかえるユーラシア大陸から切り離された絶海で、小宇宙とも呼べそうなおだやかで独立した島嶼世界を形成してきたからではないのか。この心地よい湿度を、台湾の、あるいは台湾人の美と、いつても言いすぎではない。

金瓜石の廃鉱跡

台北駅を朝7時47分に発車した花蓮方面行きの＋光号は、九ヶ・金瓜石への入口瑞芳駅に向かって疾走している。所要45分間の短い汽車旅である。瑞芳の街は基隆河にそって東西にのびている。九ヶ・金瓜石に向かう基隆客運の路線バスも街外れまで河沿いを走り、そこから山道に分け入る。九ヶまでは道が混んでいなければわずか10分の道程だが、車窓からしのび込んでくる外気は瑞芳の街区を離れた途端に清々しくなり、高度がと

黄金神社の鳥居



どんどん増していることを知る。
 バスは急勾配の隘路あいらを手際よく走る。前方に基隆山が見えてきた。天に屹立したその形状がとりかごに似ているので、かつては鶏籠山とよばれたこともある。港町基隆（旧名鶏籠）の命名もそこに源流があるらしい。進行方向右側の斜面に、やがて、九份の集落が迫ってきた。そこを越えると、もうすぐ金瓜石だ

金瓜石は急峻でカーブの多い村道や斜面の階段が幾層もの集落を結び、ひとつの山城を形成している。村の入口にある基隆客運の停車場を起点にして、徒歩で観光名所を巡ることがができる。金瓜石の派出所を通り越して前進すると道はすぐに崖つぶちで行き止まり、深い沢の向こうには屋根に巨大な黄金の関帝を

戴いたいた廟が望まれる。派出所の隣にある瑞芳風景特定区管理所でもらったガイドマップによれば、あれは勸濟堂で、なんと清の光緒22（1896）年に建立されたというから、日本の統治後間もなくのことであろう。あの黄金の関帝像を正しくは関聖帝君銅聖像とよぶらしい。いかにもありがたみのありそうな名前だが、天候が崩れそうなので山の上の金銅博物館、黄金神社方面へ足を急がせる。

黄金神社の鳥居

風景特定区管理所の裏手から斜面を登っていくと日式宿舍区があり、まだ人の住む気配が濃厚な日本家屋や半ば朽ち果てた廃屋などが並ぶ。この地に日台の縁を感じる瞬間でもある。日式宿舍区を登りつめた高みにははちまきのように山肌を走る草深い小路がのび、そこには今でもトロッコの軌道が残っている。金瓜石は日本の殖民統治の初期から藤田組、田中組などの会社が金や銅を採掘した鉱山だった。いま、金銅博物館がまさに建設中で、この地の履歴を歴史に刻む事業が進められている。

金銅博物館の裏斜面には山頂に至る小径がのびている。10分ほど登っていくとミルク色の霧の中に忽然と鳥居が現れた。黄金神社であろう。傍らの灯籠に



【左上】今も残る日本家屋
 【右下】霧に煙る金瓜石
 【左下】勸濟堂

は、昭和拾?年七月吉日」と刻されている。さらに上に向かつて歩を進めると広場に出た。空き地のあちこちに石柱だけが残り、かつてここに社殿があったことを想像させる。辺りは相変わらず深い霧の中で、さっきまで南国の太陽が大地を焦がしていたのが嘘のようだ。晴れていればここから鼻頭角の半島や陰陽海の波打ち際が見えるはずだが、今は数十メートル先の人影を認めることすらできない。

黄金神社からバスの停車場にもどる。目の前に金鉱山住宿餐厅がある。旅社を兼ねた食堂である。発車までいくらかの時間があつたので、食卓に就き什錦湯面を注文した。什錦とは日本風に見えるが五目のことで、この店では金瓜石直下の海、陰陽海で獲れた海鮮類を惜しげなく使い、この上なく美味だった。



九份の山城へ

九份は金瓜石から基隆客運の逆行便で5分ほどの距離にある。途中、山の斜面に無数の小規模建築物が点在している。よく見るとそれは人家ではなく、墳墓の集合だった。

散策の起点、旧道駅のバス停で下車し、基山街を歩く。この通りはA、B、C、Dの4区画に分かれ、いずれも天を屋根で塞いだアーケード街になっている。地元の人たちは「暗街仔」とよんでいるらしい。なるほど、天井を塞がれているので昼間でも暗く、うまいことを言っものだ。

基山街は小吃、軽食(店)が百軒以上も連鎖した観光客向けの通りで、香港人や東南アジアの華人が多い。オプショ



【左上】金銅博物館に保存される鉱山機械
【右上】灯籠に「昭和拾?年七月吉日」の文字
【中央下】金瓜石鉱山跡のトロッキの軌道

ナルツアーに組み込まれているのだから、日本人の団体にも頻繁に出くわす。A区画の名物店は「阿婆魚羹」で、新鮮な魚介類を使って練り上げたすり身が有名。乾麵の具にすると美味い。C区画にはフィッシュボールのような「九份芋圓」を売る店が多い。D区は九觀光の中心でひととき大きなにぎわいを呈している。茶房という名の茶芸店が目立つ。遊山客向けなので多くは期待できないが、金萱、高山烏龍、東方美人などの茶葉を手ごろな値段で試すことができるので、階段の登り降りでの痛めつけた足をいたわりながら一服するのがいいかもしれない。

基山街のD区画を通り越して街の最西端まで行くと遊山客は少なくなり、子供が道路に出てきて遊んでいたりする。この辺りでは犬、猫も人を恐がらず、小

童は道ですれ違つと人なつっこい視線を向けてくる。このような親近感も台北や台中、基隆などの大都市では望むことはできない。このことが、自然以外には何も無いこの山城に遊山客を惹きつける所以^{ゆゑ}である。

豎崎路の階段街

街の最高峰では九份國小(国民小学校)が東シナ海を見下ろしている。ここは山城のメインストリート豎崎路のてっぺんでもある。ここから一気に階段街を下るわけだが、途中に聖明宮があるので寄つてみる。毎年、農曆の4月1日に大掛かりな大慶典を催す媽祖廟だ。媽祖は海難を防ぐ女神であるところから、廟の入口はまっすぐ海に向かう構造になっていることが多い。この聖明宮は高台にあるので、はるか下方の深澳漁港、東シナ海を見下ろす位置に建立されている。香港など華南一帯に散在する天后廟は、台湾の媽祖廟と同じものである。海の女神媽祖はもともと福建省湄洲の林家の娘で、生前から人の禍福を予言する能力にたけ、死後は神として祠廟に祭られて媽祖廟が生まれた。媽祖は清の康熙年間に「天后」の称号を与えられ、そこから天后廟という名称が派生し、現在では媽祖廟と天后廟が並存しているという訳である。



【上】基山街のアーケード 【下】豎崎路の高所から東シナ海を望む

